

中世宗教思想文献の研究(二)

——宗性写・澄憲草『法華経并阿弥陀経釈』解題と翻刻——

阿 部 泰 郎

鎌倉時代、東大寺尊勝院の学匠であった宗性は、その生涯に、膨大な顕教諸宗の教学の聖教を書写しているが、その殆どは、国家仏事たる公請法会に出仕する為に、先行の間答記録―論義書等からの

「抄出」によって形成された文献であることは、歴史学からは永村眞氏¹⁾、文学研究からは山崎誠氏²⁾により明らかにされたところである。

大屋徳城氏の基礎的研究の上に、平岡定海氏が編んだ『東大寺宗性上人之研究并史料』³⁾により、その聖教群は年譜化されて全貌が俯瞰される。そこには、宗性の学問の核とすべき南部諸宗の諸分野に加え、北嶺の天台法華教学の論義書、注疏類も抄されているが、その他に注目されるのが「説道」とも称される唱導関係の文献である。

宗性が、貞慶の願文・講式類を聚めた『讃仏乘抄』を書写していたことは既に早くから注目されていたが、近年、石井行雄氏により紹介されて知られた安居院流や、寺門派の定円など、当時を風靡した唱導家の著述やその伝えた記録なども彼の写すところであった。宗性が長期にわたって書写した膨大な願文・表白以下の文章の類聚

たる『春華秋月抄』にも、それらが多く含まれているが、その全貌はなお知られない。しかし特に、正嘉元年の承明門院崩御に伴う追善仏事に御前僧として他宗の僧に交り導師を勤めた際に、その「為備唱導才覚」、集中的に各宗の唱導資料を収集し書写した。また、その時の記録も克明に残され、貴重な中世唱導の言説の実態を今に伝えることも、石井氏の論ぜられるごとくである。

これに導かれつつ、以下に、平岡氏編『研究并史料』に拠り、唱導文献とらしい宗性写本を改めて抽出し、その識語の一部を抄出した。

①、宗性による唱導文献の書写および唱導活動

① 建保四年〔諸人雑修善〕宗性識語*山崎誠「安居院唱導資料纂

輯(一)」翻印

：抑、今表白者、聖覚法印之所製也。哀而更可哀、後代末世重宝也。秘而又可秘…

② 同 年〔祖師法印中陰願文集〕宗性書写識語(建仁二年入滅の師弁暁の追善仏事の為の願文集)

…抑、文花者有才之所嗜、無才何嗜、風月者先賢之所好、後賢豈不好乎。仍伺學問之余暇、得念珠之隙、書寫了。

③ 承久元年〔維摩会表白抄〕宗性書寫識語

…先師法印弁曉、維摩会供奉之時、講問并精義表白也自草。終澄憲法印之草、少々在之。後代之重書、末代宝物也、尤可貴之、又可秘之矣。

④ 寛元四年〔春華秋月抄草〕

* 第十五、諸寺八講名目(中に「安居院八講為澄憲也」)

* 第十七、寛元六年宗性識語(聖覚法印略歴・相承・最勝講參・作善目錄の記を含む)

⑤ 同年〔春華秋月本抄〕第一・第二

〔後白河〕院五十日御逆修自治承三年七月十日於法住寺殿被始修之・同御逆修元暦元年十一月十九日三七日修之於六条殿の記より抄出。参加僧交

名中に澄憲・弁曉を含む)

⑥ 宝治元年〔諸宗疑問論義抄〕第七 宗性各条端書

〔宝治元年三月、聖覚法印十三年遠忌八講(同五部大乘十講)〕

⑦ 建長二年〔啓白至要抄〕第二→③目錄参照

⑧ 建長五年〔法華経并阿弥陀経釈〕↓④目錄参照

⑨ 正嘉元年〔諸宗疑問論義草抄〕第九紙背宗性識語

…去七月五日、承明門院崩御、宗性參籠御前僧之間、為備唱導才覚、自興福寺承遍律師之許、借寄此書之次、為後覽所書留也。…

⑩ 同年〔承明門院御忌中諸僧啓白指示抄〕↓石井論文参照・宗性識語

…而宗性參籠彼御前僧之間、人々啓白釈経等、日々雖聴聞之、自分啓白釈経等之案立、依無其隙、誂同法宗曉得業、所令記録也。疏荒之至、恨而有余、後昆之類、察而思之矣。

⑪ 同年〔承明門院御忌中願文集〕宗性書寫識語(内)〔承明門院葬中目錄〕

…宗性參籠御前僧、依得其便宜、尋取彼願文等畢。於京都所書置之本、為頗狼籍之故。今取清書也。…

⑫ 同年〔円覚経疏中法華経抄〕宗性書寫識語

…誂宗曉得業令書寫畢。宗性參籠御前僧之間、為備唱導才覚、自梅尾静海明心房上人之御許、借寄此書之次、為後覽所書留也。…

⑬ 同年〔転法輪抄三身〕宗性書寫識語↓石井論文参照

…去七月五日、承明門院崩御、宗性參籠御前僧之間、為備唱導才覚、自大報恩寺澄空如林房上人之御許、借請此書之次、為御覽所書留也。末学之輩、可哀其志矣。…

⑭ 同年〔法華経并開結二経卷釈〕宗性書寫識語

…而宗性、年来所持法華経卷釈、近日求失之間、為宗曉得業、自延曆寺智円法印之許、借寄此書之次、為支後要、聊所書留也。…

⑮ 文永五年〔仙洞最勝講啓白等草〕宗性書寫識語

…為自来五月三日被始行 仙洞最勝講開白講師也。…

①⑥ 同 年〔仙洞最勝講時人人草〕宗性端書識語

文永五年欲勤仕仙洞最勝講々師時、如林房上人所書送之言也。

(*他に菅原良頼・明心房送文あり。)

①⑦ 文永六年〔文華風月至要抄〕宗性識語(調伏異朝怨敵抄)に

も略同文の識語あり)

文永五年戊辰五月、禁裏最勝講第二座講師宗澄法印山祈願句中出

此因縁、宗性即倍其座、親聴聞之、感激之余、尋其本説之處、

同六年己卯三月、長講堂御八講参会之時、彼法印不忘去年芳約、

自懷中取出先師宗源法印自筆折紙、借之、仍所書写彼本也。

①⑧ 文永七年〔仙洞最勝講并番論義問答記〕*文永七年十月、嵯峨殿に

て土御門院四十回忌法華十講に講師として参勤の記を含む。

①⑨ 同 年〔西園寺御八講定円法印祈句草〕宗性書写識語(省略)

②⑩ 同 年〔代々宸筆御八講願文等記〕上公家・下仙洞 宗性書写

識語^(a)・同追記識語^(b)

(a)文永七年十一月廿七日…去年之冬十月之初、太上法皇(後

嵯峨院)於龜山殿仙洞、被始行宸筆御八講時、被撰召南都北

嶺諸寺名僧之中、宗性応其清撰、勤仕證義並第二座講師畢。

一生涯之面目、於是満足、六句余之愚老、為之出之間、尋訪

前規、為伝後代、借請園城寺定円法印之本、所書写之也。余

算残少、黄泉之波雖近、稽古志深、…

(b)文永八年二月十五日…普記置公家仙洞代々宸筆御八講旧記

中世宗教思想文献の研究(二)(阿部)

之次、安元三年宸筆御八講之時、公頭前権僧正・澄憲大僧都・

弁曉律師啓白詞、所記録也。七句之身、非願余算、三余之勤、

雖似無詮要、被引宿習、愁染燕弗、後覽之輩、可哀其志而已。

宗性は、若年より唱導文献を書写しており、①や②などは、最初

の師であった弁曉の追善・遠忌のための書写である。また、その①

や③の如く、聖覚や澄憲という安居院流の製するところの「草」を

「重宝」として殊に尊重していた消息が、識語から知られる。そし

て、彼の唱導文献書写が、事に触れ、折につけて、本宗の教学形成

の傍らでなされ、それが彼の活動のほぼ全期間に及んでいることも、

右の目録から見とれよう。

そのうち注目すべきものを取り上げてみるなら、①⑦は、最勝講の

折に、天台宗の宗澄の祈願句を聴聞し、その「因縁」にいたく感激

してその「本説」を尋ねたが、翌年に彼から「自筆折紙」にて得た

もの、という。また①⑨は、後嵯峨院の宸筆御八講に参仕し、「一生

涯之面目、於是満足」であったが、その為に「先規」を訪らい、定

円より『宸筆御八講記』を借りて写している。そこに、安元御八講

の時の澄憲等の「啓白詞」を併せて記すのである。

かように、宗性は一貫して安居院(澄憲・聖覚)の唱導に関心を

抱いていたようであるが、それは単に自らの「才覚(学)」の為ば

かりではなかった。次に掲げるのは、宗性任俗時の幼名で書かれた

所領沙汰の愁文章案であるが、彼の伝領相承する筈であった遠江国

の庄園の相承次第が述べられている。⁶⁾

①、承久三年閏十月「宗性(有夜叉)申状案」(俱舍論第二十四卷要文抄)紙背)

遠江国管秦原郡質呂庄者、民部卿永範先祖相伝私領断向後牢籠……而永範老、質侶本庄者、嫡子民部卿光範譲与、湯日郷者嫡女譲、大揚者三郎女子譲之、存生之時、配分如此。各無煩年尚。而民部卿逝去之時、嫡子頼範に譲与。

大揚郷者子依無実子、聖覚法印を譲与畢。於大揚質侶者、領掌無其煩、湯日郷宮内大輔隆兼(宗性実父)、依為嫡女之夫、隆兼に譲渡之間、先立企死去之刻、隆兼遺言可譲与賜嫡子有夜叉……

質侶庄は、母方の祖父永範が三人の子女に頒ったが、そのうち三女に譲った大揚郷は、実子無きにより、聖覚に譲与されたようである。ここに、宗性と聖覚を繋ぐ俗縁の一端が窺い知られる。それ故か、宗性はのち宝治元年、聖覚の十三回忌の八講に参じているのであるが、その直前に④『春華秋月抄草』に記された聖覚の略伝・相承系譜・および作善目録は、おそらくその追善仏事で亡者の為に何らか唱導を勤める為に用意された抄記であつたらう。

これら唱導文献書写の一環に、『春華秋月抄』の如く長期にわたる抄出の類聚のひとつとして、『啓白至要抄第一・第二』がある。これも石井氏が最近紹介された資料である。とりわけ、その第一は「説経至要抄」という内題をもつ。以下にその目録を掲げる。

③、⑦(啓白至要抄)第二、目録(内題(説経至要抄))

A ①可親近善友事 故宗春房逆修之時、可為之。(識語)

B ②院御自行御勤

已上、建久二年閏十二月二日、注之了。往日までの御勤也。

(本識語)

DC ③宝治三年二月晦日、故印円房四十九日忌辰説経聞書。導師信願御房。

④于時、建長二年十二月八日、於土御門猪熊宿所、馳筆畢。

法印宗性。

E ④建長四年十月三日、知足院信願御房五七日仏事説経聞書。御導師頼覚律師。

①建長四年十月四日、於東大寺尊勝院中堂東廊、随思出記

之了。法印宗性。

F ⑤三身

G ⑤已上、以千本如林房澄空之本、詔頼尊得業、写之畢。

H ⑥於娑婆世界惣因縁事(表白三身、説経尺の名目のみ冒頭に付す)

②已上、以光明院權僧正覚遍御草本、詔頼尊得業快舞公向人

写之畢。

I ⑦正嘉元年八月十四日、一品経供養……御導師 聖憲法印。

J ⑧正嘉元年十二月五日、承明門院御月忌御導師聖憲法印説経之内。

K ⑨嵯峨釈迦堂五経行事正嘉二年一月八日、被始行之。 初日導師本浄房……
第二日導師如輪房

L ⑩正嘉二年六月晦日、円満院法親王、奉為 前承明門女院、被
行御佛事聞書。御導師智円法印。〳〵三身事

M ⑪正嘉二年七月五日、承明門院一周忌御導師聖憲法印表白。

N ⑫正嘉二年九月九日辰時、於東大寺知足院別所草庵学窓、結
集之畢。自去年南呂之候、至此秋夷則之天、或自処々借請
之本、誂他人写之、或於所々聽聞之言、隨憶念記之。日来
之間、散在置之。今結集之、以為一帖。後覽之輩、可哀其
志耳。……

O ⑬正嘉二年九月十一日、相当光明院僧正覺遍六七日忌辰之間、
宗性凶絵地藏菩薩像、奉摺写如法花経、開結二経等、奉渡光
明院、開眼供養之。導師興福寺定真得業。彼説経云。

次、地藏菩薩御事

⑭正嘉三年三月廿八日時酉、於東大寺尊勝院護摩堂南庇、隨憶
念記之了。

*頭に付したA〵Oおよび宗性書写識語⑤⑥は、石井論文による〔啓
白至要抄第二〕の構成表に拠る。石井氏は、③をCとDに分け、⑥の
「一因縁事」の前の次第名目のみの分を独立してGに立て、また①と
別に⑧宗性識語を独立してNに立てておられるので、各条の分節が私
見と異なる。ちなみにHの前Gの「表白〳〵三身〳〵説経釈」は⑥と一連
の仏事の次第か。所謂「釈」の末に「因縁」が位置することは、澄憲

「法華経卅品釈」の構成を参照しても通例であり、その「因縁」部分
のみが独立し抄出されたものであろう。

右に示したその目録によれば、本書は全十二条の各種唱導文を、
建長二年から師覺遍の没に際して正嘉三年までに及ぶ九年間に書き
継いだものを、併せて一冊に纏めたもので、これもやはり正嘉元年
の承明門院追善仏事関係⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛
の縮図の如き観を呈する。

その②には、「院御自行御勤」として後白河院が修した法華護摩
以下五種の護摩の座敷と法華経読誦以下五種の読誦の数とが算え上
げられており、「己下建久二年閏十二月二日注之了〳〵往日までの御
勤也」と注記がある。これはむろん宗性でなく、おそらくは「転
法輪鈔」表白二、後白河院上の下に収められる「建久二年閏十二月
三七日御逆修結願表白人料草之」に対応するものであろう。すなわち
澄憲によるものである。

また、③は印円房の為の追善仏事の導師信願房（生駒良遍）によ
る説経の聞書、そして④がその良遍追善仏事の導師頼覚による説経
の聞書を、翌日宗性が「隨思出記之」したものの。⑤は石井氏が指摘
される如く、安居院聖覚の編になる①②③『転法輪鈔』と共通
する抄出である。⑥が、因縁のみを抄出したもので、光明院覺遍の
「御草本」を頼尊らに誂えて写さしめた説経草、頼尊の出家の因行
を譬えとして生死無常を説いた興味深い内容である。

これと同じく、覺遍の「御本」を写した、という宗性識語を有す

るのが、以下にその目録を掲げる『法華経并阿弥陀経积』一冊である。

④、〔法華経并阿弥陀経积〕⑧ 目録 (●印—金沢文庫本『釈門秘鑰』第十

七之三所収积)

- (一)〔法華経积〕 * 三門、「禪定聖靈法皇」成仏の爲。秦王書写因縁を含む。 一オ
- (二)〔法華経积〕 * 三門、平州遺龍外題書写因縁を含む。 二オ
- (三)〔雲居寺千手堂并千手観音像供養啓白〕 * 法華経・開結二経・浄土三部経等名目 三オ

本願上人歎徳事書居寺

四阿弥陀経略积

- 此积、為太原寂性(別部小補)入道、毎月為先妣供養、自筆阿弥陀経草送之畢。 六オ
- (五)〔阿弥陀経〕 七オ

此积、依無動寺檢校慈円法印、二十五三昧衆追善积、注

進畢。沈思畢。

● (六)〔阿弥陀経〕

此积、左兵衛督(成範)為大原土佐内侍供養、自筆阿弥陀経、

作善之次、所草也。

● (七)〔阿弥陀経〕

此积、上西門院一品経供養、以五宮御手跡、綴成假名阿

弥陀経、致供養時、案之畢。頗非神妙。 九ウ

(八)阿弥陀経略积篇々随時 * 「我君」「万歳之終、安住正念」の語

- 見ゆ。 一〇オ
- (九)阿弥陀経 * 三門、題目、分文(冒頭ノミ)の三段。 一一ウ
- (一〇)阿弥陀経 * (金本ハ冒頭ノミ) 一二オ
- (一一)次、四十八卷阿弥陀経 * 三門、題目、入文料簡(冒頭ノミ)の三段。 一二ウ

(一)〔法華経(阿弥陀経积)〕 * 三門、題目、三段(中絶)。 一四オ

(二)阿弥陀経 * (金本ハ冒頭ノミ) * 「抑、我君誦誦此典御事、十七万一千八百八十一卷」↓(三)〔啓白至要抄第二〕② 一六ウ

(四)阿弥陀経 一七ウ

(五)〔阿弥陀経积〕 一七ウ

(六)阿弥陀経 * 「我君」の語見ゆ。 一八オ

(七)佛説阿弥陀経 * 三門、「今、大和尚、忝承大師芳跡」の語見ゆ。山王法楽結願か。 一八オ

建長三年三月二十二日時甲於東大寺尊勝院中堂正面、書写

之畢。写本者、光明院上綱覚通之御本也。而去年之天、中

冬之候、於頼覚律師之許、勤仕唱導之時、申出之畢。数月

申籠之条、依有其恐、今欲返上之間、為後覽、所馳筆也。

後覽之輩、可哀其志而已。 二二オ

右筆花嚴宗末葉法印宗性

年 五十二

夏 藤 満 四 十

右の一帖は、奥書識語によれば、建長二年、頼覚の許にて「勤仕唱導之時」その所用の為に覚遍に申し出て暫く借用し、翌三年に返却するに際して自ら書写したもの、という。これもまた、他と同じく宗性にとり目的意識の明らかな唱導文献書写の一環であり、しかも全て宗性自筆の本である。

頼覚は、『啓白至要抄』④の頼覚と同一人であろう。それより一年を遡る時点で宗性が参仕した仏事が何の（誰の為の）旨趣であったかは知られないが、これは法花経と阿弥陀経の積―すなわち説経の本体をなす経釈の抄出である。そして、これも安居院流の唱導文献、しかも澄憲の草になるものと推定される。

金沢文庫に蔵せられる、称名寺二世釵阿により書写された安居院流唱導文献の中に、『釈門秘鑰』と称する仏・経釈その他の釈を類聚した澄憲自草の釈を恐らく晩年の澄憲自身が編んだと思しい一大集成がある。さきに、仁和寺に現存するその唯一の古写本を紹介するに際して金沢文庫本を含めた目録を作ったが、その中に、第十七之三「阿弥陀経略釈五篇」一帖に収められる分が全て、この宗性写『法華経并阿弥陀経釈』中に含まれている。●印を付した(五)(六)(七)(四)五篇である。うち(五)(六)(七)に本書四を加えた四篇には末尾に識語(注記)が付され、誰の為に如何なる仏事に用いられる為に草されたかが知られる。この内慈円・成範・上西門院など、何れも澄憲

活動時の、他にも彼が仏事を勤めた事のある人々で、これらは澄憲の草として良い。その他、金沢文庫本『釈門秘鑰』では冒頭しか載せられていない(四)条は、その本文中に「抑、我君、誦誦此典御事、十七万云々」とあり、これは前に触れた①『啓白至要抄』②の「院御自行御勤」の阿弥陀経誦誦の巻数と等しく、建久二年歳末の後白河院御逆修仏事の時のものと認めてよからう。この他にも、(一)(九)(十)はやはり後白河院の為のもの(①は明らかに追善仏事の為)である。謂わば「王の説経師」とも言うべき澄憲と後白河院との生涯に亘る格別な関係については、別に考察したところであるが、これらの釈もまた、その具さな法皇賛美の辞が興味深い。なお、(五)の他にも、末尾(六)条が慈円を願主とした仏事の釈であるが、これは、内容から恐らく座主に還補された慈円の日吉山王の法楽仏事の結願の為のものと判断され、とすれば『転法輪鈔』表白・神社帖に含まれる建仁元年九月に修された大宮拜殿での如法法華五種行を開白とし、その結願に聖真子で西方懺法を修した、この時に用いられた釈と思しい。その本文は、翻刻本文の末尾を参照されたいが、そこには、保元以降の絶え間ない戦乱によりもたらされた現世の転変(ひいては無常)の有様を、いさゝかどぎつぱりかりの修辞で象っており、こうした歴史認識が慈円と結び付く場において表明されるところに注目したい。総じて、他に明徴の無い条を含め本書所収の釈の全てを澄憲作として矛盾は無いと思われる。

この『法華経并阿弥陀経釈』を伝えた興福寺僧光明院覚遍は、宗

性の師である。次に、宗性写本―識語からうかがわれる覚遍の事跡ないし宗性との関係を『宗性上人の研究并史料』より抄出して示した。

⑤、光明院覚遍略歴

中御門宗輔息興福寺僧権律師宗信の子〔尊卑分脈〕(但し、〔別当次第〕には「宗覚僧都真弟」とある。)

法隆寺別当〔覚遍法印権大僧都、治廿五年、興福寺光明院、寛喜三年十二月七日任之〕〔法隆寺別当次第〕

興福寺権別当〔寛元三年任〔興福寺三綱補任〕〕

興福寺別当〔宝治元年十二月、廿八任、治一年、正嘉二年七月廿九日化〕〔興福寺寺務次第〕

①〔明本抄第一〕建治元年宗性写、建長六年宗性本奥書

……抑、此鈔者、因明第一之秘書也。彼笠置上人存日御門弟、未必見之……去嘉祿元年初冬之此、入光明院上綱覚遍之門室之後、年々歳々学之、漸々連々嗜之。三十年間其志既顯之故、去十三日、先借賜此第一卷。次第欲借之、念可書写一部十三卷之由、被仰下畢。年来修学之本意、於茲満足、今生一期之思出、只有此事。……

①〔明本抄日記并明本要目録〕建長七年宗性本奥書

(建曆三年覚遍書写本奥書「同三年三月一日、於海住山書写畢。先師上人中陰四七之後朝也。每聞顧命、断哀惜腸。

假名比丘覚遍」同二年、十二、九、貞慶付属状に付す)

②〔華嚴經觀世音菩薩感應要文抄〕貞永元年宗性識語

……抑、宗性、去々年秋比、参籠笠置寺以来、偏帰依弥勒……就中、自去嘉祿二年十月之比、入興福寺光明院法印大僧都覚遍門室之間、彼師範笠置寺上人覺御事、奉帰伏耳。而彼上人、早乘観音大士之悲願、已遂補陀落山之往生云事、現證之所示非一。夢想之所告亦多者歟。……

③〔法相宗并因明論義本抄〕安貞二年宗性識語

已上、嘉祿二年維摩会聴衆勤仕之時、光明院法印覚―所注送之論義也。

④〔金光明会論義抄〕寛喜元年宗性識語

安貞三年正月八日時段、宗性参興福寺光明院、奉対面彼法印覚―、習学之趣大旨如此。……

⑤〔春華秋月抄第十一〕寛元二年五月、最勝講表白宗性草識語

自来二十三日被始行最勝講、宗性亦預御請之間、為用意廻愚案畢之後、同十日進入光明院僧正御房覚―之御許畢。同十六日参光明院、直奉对上綱伝授之次、上綱手自加御点之本也。知此子細之人、故可用此点矣。

(同年六月、最勝講表白、宗性草識語)

……(右と同趣旨、但し末に「覚―之御許之処、此草神妙之由、被仰出、但被直恵命二字畢之本也」とある)

⑥〔積聚性因違法自相事〕寛元二年宗性本奥書

……此書者、勝願院上綱伝授光明院上綱記置之御書也。而宗性、勤仕当年維摩会精義時……

……抑勝願院上綱、自去仁治三年六月之比、御籠居生馬山竹林寺之間、因明御抄於□被進光明院上綱之御許了。仍、今度直自光明院所申出也。秘藏無極、崇重有余。門跡相承之輩、以之可為重宝焉。……

⑦〔弥勒如来感応抄草第三〕天福元年宗性始抄出、末尾識語

正元二年三春之比、或馳自筆、或詔同法……抄出之畢。是則、来四五月之候、參籠笠置寺般若院、欲抄出弥勒如来感応要文之間、為用彼土代、所抄此草本也。此料紙者、皆眞是先師光明院上綱覚遍之御手跡也。故聚彼遺書、以抄此要文。翻裏見之、頗垂先師恋慕之涙、向面読之、偏祈慈尊感応之縁。……

この覚遍は、「蜂飼の大臣」(『今鏡』)として知られる中御門宗輔の孫にあたる。三会已講・法隆寺別当・興福寺権別当を経て、興福寺別当として寺務を執るまでに至った学侶である。他寺・他宗出身ながら、宗性は、彼に嘉禄元年(二年とも)に入門して以来三十年間問事して法相等の諸学を学び、ついに因明の重書である貞慶撰『明本抄』を建長六年に写すことを許された(①)。覚遍は貞慶の高弟として、『明本抄』の付属を得た人であった(①)。同時に覚遍は、笠置に隠遁した貞慶から、観音信仰や弥勒信仰なども継承し、その遺徳を讃仰することを含めて宗性に伝えた人物でもあった(②⑦)。

更に宗性は覚遍から公請法会所用の論義草を習い伝え(③④)、また自らこれを勤めるにあたり表白の文章の添削を彼から受けてもいる(⑤⑥)。そして、覚遍の没後は、その手跡を翻えして、大著『弥勒如来感応抄』の草稿の料紙として用い(⑦)、以て、覚遍を介して継承したところの南都兜率浄土思想の集大成を計り、これにより先師への追善となしたのである。

この覚遍が、澄憲および安居院流と如何なる繋りがあった『法華経并阿弥陀経釈』を伝えたのかは不明であるが、或いは貞慶を経てもたらされたのかも知れぬ。しかしなお後考を俟ちたい。

本書のうち、最も興味深いのは(三)条である。これは、法華経釈とも阿弥陀経釈とも見えない。両群の中間に位置し、雲居寺千手堂供養の為の啓白ならびに「本願上人歎徳事」の二段から成る説草の一部である。両段の中間に、願文等の次第の一部や経題が含まれている。啓白によれば、七日の仏事の第二日目、千手観音を讃歎し法華経を講ずる分の説草であった。

この千手堂供養が何時誰により行われたものか、目下のところ明らかでない。表白中に、当寺草創より百十五年を経る、と言い、願主を「法主禅門」の逆修善根として営まれたことが知られるが、なお明徴を欠く。『百鍊鈔』によれば、寿永元年十二月十日に「入道大納言隆季」により「雲居寺堂供養」があり、金山院と号されたところがある。四条家の鷲尾山荘の一角に営まれた金山院の創建であるが、これかどうか不明である。

て説経する際の高座上の奇瑞を伝えるものであった。ちなみにこの師綱は、白河院の近臣の一人であり、『古事談』によれば、陸奥守として赴任し奥州下向の際、奥州藤原氏の基衡と対決してその「高名」が世に聞こえたとされる人物であり、次でに彼に従う「侍猿蓑」奈良法師覚了の嗚呼嘯がおまけに添えられ、「物語」媒介者の気配が滯う。

説経師としての膽西の活躍を伝える当時の史料には、「言泉涌くが如し」(『永昌記』保安五年四月二日条)、また「出る泉の涌くが如、法の言葉も尽せざりけり」(『基俊集』「雲居寺膽西申せ経を聞て、めて侍し人にかはりて言ひつかはしける」と讃えられる彼の弁説の妙は、『袋草紙』雑談の、高座より下りたところでの当座の秀句しか伝えるものがない。しかるに、この師綱の「物語」の伝えるところは、膽西の説経が、齒のはざまより口中光り輝くほど、彼の見聞された、そうした聴衆の讃仰のまなざしが感得したものではなからうか。これは、説経の力がもたらした奇蹟であつたらう。それを澄憲がすくいとり、あらためて靈験譚に仕立て上げたのである。ここに、説経において、説経師が説経師を形象する。澄憲が己れの先達として促えた学生説経師膽西の面影が彷彿とする。しかも、加うるにその「発心の因縁」として雲居寺大仏造立の縁起が説かれ、従来知られなかった勝応弥陀院の建立と供養の消息が詳らになつた。

後世、『新古今集』に収められた膽西の和歌を種子として、『秋夜長物語』は、膽西の発心の因縁として、三井寺の児梅若と山門の悪僧桂海との悲恋を物語るようになるのであるが、その遙かに溯る傳承の流れの源に、雲居寺を舞台とする唱導説経の庭において、その「発心因縁」を安居院澄憲が説いたのである。それは誠に示唆ふかいしわざであった。

ここにもまた、澄憲および安居院を介した、説経唱導の一脈の系譜というべきものがうかびあがるであろう。

〔注〕

- (1) 永村真『中世東大寺の組織と経営』塙書房(一九八九)第三章「中世東大寺の諸階層と教学活動」。同「法会と聖教」『日本女子大学文学部紀要』号(一九九二)等。
- (2) 山崎誠「学侶と学問」『説話の場―唱導・注釈(説話の講座・第三卷)』勉誠社(一九九二)。同『中世学問史の基調と展開』和泉書院(一九九二)。
- (3) 平岡定海編『東大寺宗性上人の研究并史料』日本学術振興会(一九五八)(六〇) 臨川書店再刊(一九八八)。
- (4) 石井行雄「中世唱導余響―唱導資料としての東大寺図書館蔵『承明門院御忌中諸僧啓白指示抄』」『説話文学研究』24号(一九八九)。同「安居院流唱導書と説話」『説話の場―唱導・注釈』勉誠社前掲書。
- (5) 平岡注(3)前掲書。
- (6) 平岡注(3)前掲書。
- (7) 石井行雄「香山余薫―中世唱導に於ける白居易詩句受容の事例―」福田晃・廣田哲通編『唱導文学研究 第一集』三弥井書店(一九九六)。

- (8) 阿部「仁和寺蔵『釈門秘論』解題と翻刻(安居院唱導資料纂輯内)」「国文学研究資料館・文献資料部」調査研究報告』17号(一九九六)。
- (9) 阿部「唱導における説経と説経師―澄憲『釈門秘論』をめぐりて―」「伝承文学研究」45号(一九九六)。
- (10) 阿部「慈円作『六道釈』をめぐりて―慈円における宗教と歴史および文学―」「文学」第8巻4号(一九九七)。
- (11) 雲居寺が膽西より以降、中世を通じて唱導説経の場として独特の性格を有していた消息は、観阿弥原作・世阿弥改作の能『自然居士』にあざやかに示されている。膽西と自然居士の繋りについては、『文学』第8巻4号(特集「中世仏教の文化圏」)座談会「中世仏教の臨界」中の松岡心平氏の発言(12頁)を参照されたい。また、澄憲と自然居士について、説経を芸能の視点から論じた拙稿「唱導と能―二人の唱導者の肖像―」「国文学」第31巻10号(一九八六)がある。

〔書誌〕

本書は、東大寺図書館所蔵、一一三函五四号、仮綴(紙経綴)一冊。法量、縦三一・一糶、横二五・五糶。無界。半丁十二行。墨付二十一丁、遊紙後一丁。表紙中央外題「法華経并阿弥陀経釋」(宗性自筆)。表紙左下識語「權大僧都宗性」(宗性自筆)。表紙見返識語「墨付貳拾貳枚」(別筆)。奥書の書かれている丁の裏に、臥立者表白の一部かと思しい草案が書かれている。本文・奥書は全て宗性自筆。その装丁および書写形態は、他の宗性自筆写本(論義書等)聖教の多くと共通する様式である。

謝辞

本書をはじめとする宗性書写本の閲覧については、東大寺図書館の御理解と御許可を蒙り、拝見が叶った。また、本書の翻刻を快くお許しいただいた事について、深く感謝申し上げます。

(追記)

本論中に言及した宗性書写の安居院唱導書のうち、『転法輪鈔三身』一帖は、山崎誠氏により、「安居院唱導資料纂集(七)」「調査研究報告』18号・一九九七)に翻刻・紹介された。併せて参照されたい。

〔翻刻 宗性写「法華經并阿弥陀經釈」凡例〕

- 一、原本は宗性の独特な字体で半丁十二行詰めに書かれているが、(翻印では特に段落を分つ処や次第書きの他は改行を示さず詰め送りにして、改丁の部分のみを示すことにした。
- 一、全体は十八条の釈で構成される(解題中の表④参照)が、その各条の冒頭に通し番号を付して参照の便りとした。
- 一、原本の字体に近似する通行の正字及び通用字体を併用し、一部の例外を除き簡体字や異体字もその何れかに訂した。
- 一、通読の便宜の為に、私に句読点を施した。
- 一、一部に付されてある返り点や訓仮名は、これを残した。
- 一、本紙の破損等により判読不能の文字についてはそのおよその字数分の空格を以て示し、難読の文字については私案を宛て右傍に(カ)と示し、誤字と思しい文字については同じく(ママ)と示した。

法華經并阿弥陀經釋

權大僧都宗性

表紙

墨付貳拾貳枚

〔表紙見返

(一)凡、今經、序分^六燈明王、分前後、成佛說。此經正意、大通王、分兄弟于後講、萌佛種^一。流通、往昔國王、隨逐仙人、得此經^一、妙莊嚴王、修行此經成佛。爰知、一經規模、以國王為機緣、十善王位、依此經可得道^二。

先院聖靈、滅罪生善、往生極樂、可酬今經力^一者歟。

昔、秦王、為亡親書寫此經^一、僅書一卷^二給時、先帝夢中告云。

善哉聖王、自手造經、乘此功德、生切利天、供養之日、當生第四、

奉仕弥勒、聞法悟解云々。僅書寫両軸、勝利如此。況於一部書寫哉、況於八座論談哉、四十九重摩尼殿中、如秦王、奉仕弥勒告、設不同旨、十萬億土西方淨利之間、聖靈定面見弥陀願、必遂之御スベシ。

彼、祈先王得道、此モ訪先院菩提、妙法功用、是等、幽儀得脱何疑。禪定法皇聖靈、一乘妙法久持、五種修行多積。定知、成佛得道可レ依此經力云事。然則、此經如暗得燈經王也、聖靈、必依此經可拂御ス生死迷闇、此典如渡得船妙典也。幽儀、必依此典可渡苦海波浪。

「一」

(二) 妙法蓮花經可有二門

若自書、若教人書、所得功德、以佛智惠、等量多少、不得其過。一乘書寫功德、佛ノ智惠、不得窮其過トフ候へ。常事候へトモ、彼平州遺龍ト申者、究竟能書也。懸針垂露之點、不スナレトモ尔王右軍ヲモ、臨池入木之功、顧蒼頡跡ヲ。其口惜カリシ事ハ、生テ外道家、永不信佛法トリキ。可レ学レ法門トテハ外道舊弊ノ邪法、敢非大聖教法ニ。所書ク文字トテハ、四韋陀書・十八大經、全背如来所說。爰、平州大王、尊重シテ法花經、如法書寫シテ之、究竟能書ト云テ、勅シテ遺龍、令書其外題ヲ。吾生外道家ニ、永背ク佛教ニ之由ヲ申、堅ク辞退之、雖然、王事無鹽、勅宣有限シカス、王威ニ被テ責、書八卷外題ヲ畢。其夜、遺龍夢中告云。我是、汝父也。背如来

正說ニ、習外道邪教之故、墮叫喚地獄也。然汝、書法花經八卷外題之故、八々六十四佛ト頭レテ、為レ我說四句偈ヲ云。假使遍法界、斷善諸衆生、一聞法花經、決定成菩提云々。即、地獄猛火、變為清涼水、我及諸罪人、悉免地獄報、生第四都率天也。百千天人、即共得脱セシ衆生也、告候シ。實嚴重也利益ヲ候メレ。第一第二云文字ハ、韋陀典籍ニ書タルト只同事ナレトモ、所詮カ外道法カ故、父母親族ヲ天上ニ不導ス、罪業衆生ヲ地獄ニ不出サス。遍依テ王宣ニ、心ナラス書レカトモ、法花經ハ、皆成佛ノ妙理ニシテ、所寫ノ懸針垂露之點、悉疾成菩提之文字也ケレハ、外題許ヲ書シニ、六十四文字、併佛ト頭シテ、救遺龍父地獄苦ヲ、導觀率天上給シハ非哉。況、今、一乘三蜜、薰修潔シテ寫之、御ス。彼邪見外道、僅寫八軸首題文字、亡親忽生ヒキ天上、是、信心孝子書一部妙文、聖靈何不遂淨土往生哉。然則、六万九千露點、悉三身圓滿如来也ト知。莫疑、一々文字放光、奉授聖靈、佛々増進ヲ。

「二」

(三) 修營一寺之伽藍

修補シテ數牀之佛像ヲ、啓白シ三寶之境界、祈請二世之悉地ヲ、御ス、甚深殊勝大願有。夫、倩案流來生死本源者、以癡迷ヲ故、法性變テ作リテ無明ト以來、生死ノ浩然トシテ輪廻久。所以、曠劫多生之間、鎮ニ結レ火血刀之業因ヲ、阿僧祇劫之中、不聞佛法僧之名字ヲ。是以、幽ク長夜之闇中迷ル覺路ニ昏醉之身也。漫ク苦海之浪上失ル浮囊ヲ常没ル之人也。依之、

適雖值ト佛教ニ、在滅後ニ其緣惟淺ク、希ニ雖受トリト人身一ヲ、生レテ濁世ニ其業尤重シ。付中、末田地カ坐禪之床、佛法陵遲之水深ク湛ヘタルミカハ。沙羅林ノ円寂之後、二千餘年之霜久ク積マテ、諸寺諸山佛法陵遲シ、自意他意鑽仰窓荒ク。而、當寺者、草創年舊、一百十五年星霜、雖多改飭、依猶新三尊一心歸依人幾許。草創之後、一百十五年歲月積^三佛像色變、建立以來五万九千日、雨露侵黃金不全。爰、於當寺傾頭合掌之輩、起大誓願、修補大伽藍、修大佛事、致大興隆^ヲ。當善願円満、開七日嚴重齋席。今日第二日、讚嘆千手觀音、開演一乘妙典、佛必御知見^レ給ヘ。而、法主禪門逆修善根、多年素意、令得勝利ハ一生願念也。仍、就當伽藍、七日最上ノ惠業ヲ勤ク、一向清淨ノ作善ヲ致ス。信持三寶、哀愍歸依、諸天納受セン。佛者大慈大悲之尊容、面兒類ヒテ秋ノ月ニ而円ナリ也。經者隨他隨因之妙文、點畫垂曉露^ヲ而鮮也。云佛云經、功德莫大ナリ。今世後世利益豈空哉。然則、此善加力之輩、我願同志^ニ之人、早成就^{シテ}二世悉地、必往生一佛淨土矣。善願旨趣、功德本意、存略在之、委旨、守護ノ冥衆、常住ノ三寶、證明知見^レ給ヘ。

次願文

三

新寫經

經題

歸命頂礼一乘妙典

一切諷誦

當七日修善第二日

奉修造一間四面千手堂一字

中世宗教思想文献の研究(一)(阿部)

奉讚歎安置丈六千手觀音像一鉢

奉摺寫妙法蓮花經一部開結一經各一卷

淨土三部妙典

本願上人歎德事書居寺

本願上人、無疑非只人、已是、實權者也。七八十年間ノ人事ナレ、

經論傳記^トニハ見ユヘキ事ニモ不候[。]只、此世ノ物語^{ナト}ニシテ傳タルヲ以テ云フハ、

無止^ニ事カナトモ可信^ニ事ニテ候ヘ。宗形^{マツ}大膳大夫師綱申シ、人ハ、^四

昨日今日^{マテ}候ヒシ人也。其物語^ニ被申候^レ、我、宗形^ノ大夫^ト當初

若カリシ時、一鋪圖繪佛^ヲ、以膽西上人為導師、令供養之時、金色

光三寸許有ルカ、繪像御口^{ヨリ}出マテ、聖人口^ニ通ス。或、御明ノ光歟^ト疑

思^テ、吉々見之、敢非僻事、正^シ佛御口^{ヨリ}光指^{シテ}聖ノ口^ニ入リ、說

經ヲ^ハ齒ノハサマヨリ口中ヒカリヲ見エキ。殊勝奇異事^ニテ侍リシト被

語候^ヒケル。サレハ、此勝應弥陀院ノ靈地、彼本願上人舊跡故、此處

結縁、此砌運歩之人、必可遂淨土菩提願哉。人^ヲ勸メ、代^メ勸メ、

預本願上人引撰、可思也。

夫、本願上人、此大佛造立ノ發心ノ因縁、河内国、大平寺、六丈

觀音、是、我朝第二^ノ大佛也。往年之比、依大風^テ堂舎^モ顛倒シ、佛

像^モ破壞シテ、安置^ノ所^モ無ク、修補人^モ無シ。上人見^レ之、法滅苦提

心^ヲ發シテ、奉造立^ラレ候ケル。夫取^テ、カハカリノ大佛・大伽藍、一

兩年内^ニ不日畢^ムト^ハ四^ウ功、難叶^キ事^ニテ^フ候ヒケメ。然^ニ、保安三

年十一月三日、手斧始^レテ其時、被立願^{ケル}様ハ、今年^ハ已晚^ヌ、明

後年七月十九日、一千日迎講并九ヶ年念佛結願、兼^テ弘慈父及先

師忌日也。種々大事、皆其日ニ當タルニ、同者、件日、此大佛・大伽藍造リ立テ、遂供養ト被思企候ケル。可有トモ無願欣ニ候ナレ。然只中カ一年ニ候ナレ。夫ニ、八丈尊像、紫摩照曜シテ瑩顯シ、三層ノ伽藍、土木功了テ瑩立テ、崛百口淨侶、展一日齋筵、如思テ遂供養畢。手斧始日思企テ事、佛力感通僅經中一年テ如本意、大願成弁畢。衆生願望、速成就セサセ給佛ヤラムト覺候。何況、造立供養之後、七十餘年、行業日新ニ、薰修年古タリ。功德モ弥増進、靈驗モ定イテシルク御スラム。サレハ、今、勸進上人ノ念、大願モ定成就、十方壇那ノ一々所求モ速田滿給ハムスラムト覺候也。滅罪生善之勤、歳々ニ勤テ無怠、^二五^一念佛轉經之營、朝々營テ弥盛也。行業薰修無^十止大伽藍也。

一五〇

(四)阿弥陀經略釋

將釋此經、任何、用三門。初大意者、釋迦取穢土、弥陀設淨国、一子慈悲是同、八相化物無異。但、穢土成道、堅固大願、雖牢強度人有量有限。淨刹作佛、壽量長遠、似懈怠、利物無窮無盡。故釋尊教法、有二本意。其在世之當機、聞法即得道、其滅後之衆生、獸穢須生淨。是以、弥陀教法、正被滅後、蓋斯謂者也。此弥陀教法、其經非一、其法蓋多。觀經明十六之觀門、雙觀述冊八之誓願。今此經、包括二六妙觀、吞納六八弘誓。明七日正因、揚六方護念。群經綱要、衆典肝心而已。所謂、十方中指西方、惡方中示極樂、

專宿望於一方、留欣求於極樂。其上、讚淨刹衆德、對^レ穢土諸惡。弥陀現在、积迦入滅。弥陀無量壽、积迦八十算。弥陀光照十方、积迦光必不然。弥陀臨終必現前、此願又在积迦。国土無三惡趣、娑婆專有之。人民等^六命無量、娑婆壽九短。極樂無衆苦、娑婆有衆苦。娑婆瓦礫荆棘、高下不平。極樂坦然平正、黃金為地。彼土不退也。此国無常也。都以淨国一々莊嚴功德、翻對穢土。獸此欣彼、是其起、教人意也。况、七日念佛、題目易修、六方古相^六隆通無疑、生西指南、豈以過之哉。教目行足、於斯為窮。故讀此經者、即名念佛、持此典者、即講正因。善導、愍勸勸進、法道、傳宣流通。經題勝權可知者也。

次、題目者、佛者、内朗三覺、外吐八音。說者、大智等流、至覺所宣。聞者得益、持者開悟。阿弥陀者、淨土教主也。名下含二無量德、舉教主名号、撰依報衆德。經者、聖教都名也。

次、分文。依大師義記、大分為三。如是大衆俱、序分。余時佛告至此為甚難、為正宗。佛說經已名、流通。就序分、唯有通序、無別序。就正宗、前明依報、後明正報。就依報、先日明、次別明。就正報、前明化^六主、後弁徒衆。次勸持往生有三、初正勸、次證、後結。委細分文、如人師解釈。

此积、為太原^六寂性^六入道、每月為先妣供養、自筆阿弥陀經草送之畢。

(五)次、阿弥陀經者、苦海之舟楫、到岸之舩筏。卷唯一軸、教僅五紙。

淨土之指南、往生之業因、以此教為最要、以此經為軌範。具如諸師之積、事又詳往生傳。先讚淨土之莊嚴、次述教主之功德、後示念佛三昧之行因。終引六方善逝之護念。國土莊嚴者、七重行樹、具七寶之花菓。八功德水、湛八味之清水。觀樹則微風吹動、如作百千之伎樂。衆鳥和鳴、皆唱根力之法門。觀池則七寶階道、影浮梵^{〔七〕}摩尼之水、四色蓮花、光皎紫摩金之岸。凡、鳥聲波音、悉是微妙之法門、花開葉飄、莫非解脫之色塵。實知、法藏比丘之願力、弥陀如來之變化。正報功德者、光明無量、照十方之刹土、壽命無量、化九品之生人。化導長遠、引接無邊。因納十念、行限七日。故、生彼土者、猶如盛市。依之、弟子無量也。隨此行法、憑其誓願、誰不遂往生乎。已今、當之、教願^{〔七〕}皆期不退。上中品之生人、同蒙引攝。宜哉、六方諸佛、共致護念。五濁^{〔七〕}积迦、專述嗟讚。以之、為經大概。善導和尚、寫此經十萬卷。懷感禪師、誦此經卅萬遍。皆是、往生之規模也。未誦者、被除往生之員。纒持者、決定淨土之業。實知、此法異他典、能可思擇。依此功德、答此法力、同法亡魂、必生極樂。衆生法界利益、自然三尊衆聖、悉知證明。

此釋、依無動寺檢校慈円法印、二十五三昧衆上善釋、注進畢。^{〔七〕}沈思畢。

大意者、夫、往生淨土之教行、凡夫出世之津梁也。但、淨土多十方、何國易往。諸佛滿刹土、何佛厚緣。側聞、弥陀、本願、誓度

娑婆。安養淨刹、本為我等。是以、积迦大師、深鑒機感、一代教中、多讚弥陀。靈山宣揚九品之往生^{〔七〕}、舍衛敷演七日之念佛。雙卷明六八之弘誓、般舟^{〔七〕}示三昧之方軌。斯諸教中、猶殊勝^{〔七〕}此典也。極樂指其國、易往即不退也。弥陀示彼佛、有願又契深。聞水鳥樹林之莊嚴、欣求之心先進。想聖衆來迎之儀式、臨終之念且靜。勝因易成、七日百萬稱念、誰不勵。疑心永斷、六方三千舌相豈虛妄。寔可謂略而要約而深者歟。^{〔八〕}

題目者、佛者、娑婆大恩、教主。說者、梵音八種震雷。阿弥陀者、極樂化主。十方諸佛所咨嗟、五濁能化所勸進、攝所有之衆德、歸能化之一身故、但云阿弥陀也。經者常也。

此釋、左兵衛督、為大原土佐内侍供養、自筆阿弥陀經作善之次、所草也。

(七)大意者、明極樂依正二報也。依報者、四十八願莊嚴淨土、以畢竟空寂為大地、以無限善根為莊嚴。寶樹列玉、枝葉花菓互輝乱轉。宮殿比覺、金銀瑠璃交色照耀。大地敷黃金、天人往來其上。宮殿垂珠簾、聖衆止住其中。八功池水^{〔七〕}四邊階道波寫、階影變色、階映池水增光。加之、鳧鳥鴛鴦之鳥、迎六時而和鳴。青黃赤白之蓮、貫^{〔八〕}四季而芬馥。羅網遍虛空、隨風吐^{〔七〕}妙法音、曼陀常濱紛、降空^{〔七〕}積瑠璃地。往他方供養諸佛、迎本土飯食經行。皆是、法藏比丘願力之所感、弥陀如來功德之所顯也。次、正報者、教主身量廣大、色相莊嚴奇妙也。八万四千相好、如貫秋星、七百

五俱胝光明、似集朝陽。魏々居七寶地之中、堂々坐千花臺之上。加之、四十一地菩薩、聚集如盛市、百千萬億聲聞、都會如稻麻。或經行寶階之上、或遊戲寶樹之間。或坐禪入定、身心無動、或說法教化、巧說恣弁。忍辱慈悲之情互親、愛語同事之行共昵。朝親近觀世音、夕問訊大勢至。昨日恭敬無盡意、今日給仕除蓋障。念々入普賢願海、歩々近如來智地。光明寶林皆唱妙法、況於教主說法乎。宮殿樓閣各有光明、況於世尊御前哉。光明宛容國界、每物如見鏡中影。法音遍滿淨刹、每聲如聞梵音響。淨土莊嚴、蓋以如此。聞者誰不欣樂哉。」^九

次、勸七日念佛、彰淨土之業因、舉六方證明、除末世之疑惑。此積、上西門院一品經供養、以五宮御手跡、綴成假名阿彌陀經、致供養之時、案之畢。頗非神妙。

(八) 阿彌陀經略積

此經者、方等大乘所撰、諸佛願行慈悲法門也。紙數僅五紙、卷軸只一卷也。大聖以慈悲量應於淨穢、蓋是、依機淨穢娑婆、是雖染世界、凡聖同居之境也。所有六趣生、具四信三惡、是純苦之處、唯惡業所感也。六天是純白之報、唯可愛妙果也。色界禪定果也。故此三界因、有善惡果、有苦樂業、有定散報、有麁妙。依之、名雖染世界。彼極樂世界不尔。法藏比丘、願力所感也。全非凡夫苦業之感得。菩薩本行道之時、有淨土國土成就、衆生願因、令感此淨國也。」^九法藏比丘願行之所成、蓋此謂者也。經云。彼土水鳥

樹林、皆出法音。謂之、皆是阿彌陀佛、願令法音宣流變化云々。故開光明寶林、演說妙法聞、即證無生法忍者也。故聞、彼國界一向作欣求思、是捨生死苦業、所感土、欣諸佛行願、所感佛土也。此經緣起、蓋以如此、以之為大意。

題目者、佛者、此土教主、正可指積尊。說者、通指一代別名。此經、是方等大乘通稱也。阿彌陀者、淨土教主、有無量光・無量壽二相。經者、聖說通号也。

(九) 阿彌陀經釋篇、隨時

阿彌陀經

此經肝心者、以念佛三昧為急要也。說極樂依報云、厭娑婆苦域。」^三說弥陀光明、令生渴仰。誠心澄、只勸未代行者、為入念佛一門也。故、一日七日之念佛、以之為意極。散心定心之稱名、以之為肝要也。縱聞淨土莊嚴、聞佛功德、無六方諸佛之護念、無五濁能化之勸進。從聞之、都不稱念阿彌陀名号、不安住念佛三昧之人、如有網不得魚、如有油無火、如有藥不服、如有因不行。末代凡夫、不論貴賤賢惡、不謂定散多少、稱念弥陀大悲名号。以之為別要、非啻此經勸之餘經多尔。占察經云。若人願生他方、淨佛國者、隨彼世界、佛之名号、專意稱念、一心不乱、決定得生、彼佛淨土、善根成就、速成不退云々。旨心可思此文。何況、案龍樹智論心、一切之三昧法門、等治必不遍、或唯治貧欲、不治餘煩惱。是不淨觀也。或只治散乱、不能餘、持思念是也。或只治嘔、不治餘、意

心觀是也。或只治愚癡、不能餘、因緣觀是也。或治煩惱、不滅業。或治業、不治報。^{三〇}或見定力等、生魏々光明、或不能見佛光明。二乘醉明、皆捨勝處等觀是也。或只觀三界苦、不及欣他方淨土。八聖種觀等是也。念佛三昧法門者、三毒等治、三障共除。三毒者、貧瞋癡也。阿弥陀如來、十二光中、清淨觀觀音智惠三種光、如次治貪瞋癡也。自無貪善根生、故名清淨光。自無瞋善根生、故名觀音光。自無癡善根生、故名智惠光也。次、三障者、煩惱業苦也。三毒共滅^{スルハ}、即除煩惱道也。念々滅八十億生死罪、除業道也。念佛人、冥得佛菩薩護持、故身無病、鬼魔不得便、其身安穩、是除苦道苦也。况、捨分段垢穢之肉身、得西方安樂相好在嚴身、豈非滅苦果哉^{旨言也}。

我君、旁修此念佛三昧、三障悉除御事、見量無疑事也。或除疑心、無起懈怠。行心無退、善心日々增長。慈悲念々深重御、是除煩惱障也。無始已來一切罪障消滅御、故、龍天善神、鎮奉權有罪障者、^才縱復修善、不見靈驗、不彰聖應也。又、玉躰無恙、猶如金剛、秋霧不近、朝露不侵、無有病痛、顏色鮮白、蓋是、持經御現報也。又是、念佛三昧利益也。故、万歳之終、安住正念、三障共不起、三尊必來迎、更無疑者歟。

(三)阿弥陀經

又開三門。大意者、獸三界之穢惡、欣九品之淨利者、出離之要行、末代之目足也。但、淨土教文、非一定。故業因蓋多。十六觀門、

中世宗教思想文献の研究(二)(阿部)

六八弘誓、般舟行法、秘密神咒文、顯密禪門、巨一紙讚歎。然而行者所持、往生業因、不如此經。故發心者、說持之、弘經人、必弘之。法道和尚、傳極樂法音、以此經和其音韻。善導和尚、定往生業因、以此經為其定業。七寶八功之花地、親依報略定。旁今、光明之無量、仰正^三報無問。是以、六方諸佛、吐舌相證明之、五濁釈迦、稱難信證說之。以之為大意。

題目者、佛者、一代教主。說者、八音等釈教也。阿弥陀者、舉能化一号、攝所居衆德。經者、聖教通号也。

分文者、大師、分三段^{如義記}。

(二)阿弥陀經

淨土之目足、往生之軌範、專在此經。只歸此法。其故何者、初標教主名、示國土号。衆生背東向西之始也。次述國界嚴飾、讚衆德成就者、聞者獸穢欣淨之源也。次明七日念佛、舉六方證明者、赴道除疑之要也。後述一代之難信、標五濁之希有者、勸末代之信心肝要也。故、唐土善導和尚、論此經、為往生定業。本朝惠心先德、^以此經、稱日々受持、蓋此心也。

(三)次、四十八卷阿弥陀經

願講此經、常稱經之儀、可用三門綱要。先起教大意者、倩案一代教法、恩五時說經、八万十二、皆開甘露門。大小權實、各示解脫路。悉是疾病良藥、皆必不盲冥唱導。然而、機有頓漸、緣有過現、

時有像末、教有規矩。教甚雖高、機不稟者不證、譬如盲瞽向太陽。法最雖深、時不合者無別、喻同臨皇天期滯澤。佛教隨時、行人待證、蓋亦如是。方今、當世行人、戒律誠問、禪法永忘、不得衆聖冥加、不值明時教誡、觀念成不、不足論之。法門門遮、無人決之待為。問證禪師、猶不住心於籠住細住欣為。誦文法師、又無持胸於十軸甘軸ヲモ。十乘十境之鏡、入苦不開。五相五輪之珠、裏衣無知。故、不披千ニ經万論、口只唱一佛ヲ五字、不修四禪八定、心只念九品三輩。此教叶末代、此行應凡夫。依之、以弥陀一教、為群生眼目、以念佛一門、為迷徒津梁。既叶時叶機、可能修能勤者也。而就往生教文、其說猶廣。雙觀明六八之弘誓、觀經示十六之觀門。三昧行方出般舟七日念佛、依弥陀淨土ニ旧相、教主弘願、皆非不要、須肝心、猶不如此經。卷軸唯一、紙數即五、約略甚少、故受持人、少暇多功、肝心非廣。爰思惟者、収願盡觀、何況、聞水鳥林池之莊嚴、欣求願先發、想聖衆來迎之儀式、臨終想旦靜。加之、七日百万之念佛、雖懈怠者豈不勵乎。六方三千之舌相、雖疑心輩爭不信哉。五濁釋迦、有三重愍イタシ之勤持。六方善逝、成一心護念之誓約。故此經者、十二分之肝要、八万歲之編鍵。生極衆教中猶殊勝也。讚弥陀經裏猶最要也。故、善導和尚勸之、必誦十万卷、定寫十万卷。懷玉禪師持之、ニ讀持卅万卷。源信僧都讚此經云。發心者、先持此經。弘經人、必弘此經云。此詞、廣有所勸歎。又云。通思於帷帳內、取證於塵刹外、此經也。此語、深有所存歎。故、僧都解釋云。此經中、具有弥陀四十八願、兼誦十

六想觀云々。至此義者、末學輒難可悟。寔仰先達解積、以此等為大意。

次、題目者、佛者、三千能化、忍土教主ニ。說者、部屬方等、機巨四教、円旨一演、異類等解。別論之、方等大乘也。要說淨佛國土之正典也。阿弥陀者、極樂教主、梵音多含也。具翻合光壽二無量德、經中讚所居淨國、述弟子無量、以肝折弟子、以正報林依報也。而舉能化、一身折所居万德、故以為名也。

入文料簡三段、如天台義記。重委料簡文段、初一段、有通序無別序

(三) 釋經

佛說阿弥陀經、常式可有三門積。大意者、此經者、淨佛國土、成就衆生、妙果妙因、為大意也。就中、委論之、就教主、可明妙因妙果、只佛依正二報不說、昔因行、以果可推故也。佛土既四十八願莊嚴淨土也。觀佛土嚴妙、可知昔願行妙也。出行者妙因妙果、共明之。妙因雖多、妙行雖區、以念佛三昧為其急要、故明因顯了也。妙果者、行者依念佛妙因生淨土、依正共殊勝也。依報者、淨土勝妙、九品往生人、共莫不受用。正報者、人天同備三十二相、具五神通、壽命無量也。勝妙喜樂、充心滿身、是行者妙果也。凡於六塵境界、具論之、各有三種勝妙。色塵三種者、樹列七珍花菓共言妙池滿八功、沙石皆殊持也。况、七寶階如虹、巨浮影於八功水。四色蓮各ニ開、交光於衆寶序。又宮殿樓閣重々堂々雲肩霞

軒交、七珍照耀、重門高閣合衆寶映徹。如此所有境界、悅目驚眼、不可勝說。次、聖衆所者、衣服色、誰人染出、何所裁縫。非梵天染禪之色、非忉利輕妙之糸ニモ。以万德為經緯、以無漏為染色。言二色塵也。次、聖衆勝色身相好、無好醜、無高下。皆具三十二相故也。勝舍脂夫人四万之媚、超淨愛天女冰雪之膚。或十地等覺之無垢容、或無生法忍之法身膚。向此忘彼、右望左不知。面謁無飽期、問訊無休時。是第三。色塵也。次、聲塵又有三種。一者、空中聲。所謂、微風吹樹林、吹羅網。其聲微妙、如百千音樂同時作。第二、衆鳥和鳴聲。孔雀鸚鵡鸕鷀鶴、其聲微妙、其時哀雅、勝上元夫人之歡、超妙音天子之樂。唱四諦十二之法門、吐七覺八正之音典。第三、聖衆言語、弥陀說法聲。四弁八音、遠近等同、淺深同語、不能具言。聲塵三種如此。次、香塵三種「ウ」者、池中蓮花、微妙香潔也。准知陸上樹林、花菓共馥「ウ」。次、聖衆衣服、妙香熏烈「ウ」。皆帶五分法身之妙匂、共三聚淨戒之薰持「ウ」。拓匂分若之三日ノ座、勝石季倫芳虛臺威「ウ」。第三、佛身聖衆妙香。法花三變淨土、十方分身、釋迦來集之時、身出妙香、通十方國土。准之思之。如來「ウ」法界万德香「ウ」。聖衆善士功德香芬馥「ウ」。此香最勝、臭者皆增進佛道「ウ」。次、味塵又三種。第一香飯味。彼土衆生、朝往十方佛國、先供養諸佛食時、飭本主飯食經行云々。其飯食、何世間味「ウ」。勝不死甘露、超醍醐滋味歟。次、禪悅味「ウ」。チムアレタムハタナル法喜「ウ」。味ノ甘甜常樂「ウ」。養法身廣大ナルヲ。保シム惠命長遠ナルヲ。次、觸塵亦有三。一者、非熱非寒、時節調和、觸寒熱、共觸境也。

中世宗教思想文獻の研究(一)(阿部)

穢土嚴寒如割膚、極熱如焦身、一「ウ」不可堪忍。彼國無春秋冬夏之別。亦寒溫調和之時「ウ」。觸節臨時、全無時節之苦。第二、内外左右種々「ウ」。浴池、衆生々彼、隨好沐浴、洗煩惱垢、除罪障塵。未得道「ウ」即得道、未證果者皆證果。第三、衣服妙觸。彼土淨妙衣服、麗奕輕妙、觸身有樂。次、法塵亦有三。初見淨土、通見佛刹、聞法等、三種勝善、未曾有極悅也。勝第三禪樂、如此。觸六塵境界、莫不言妙極樂稱誠感。七日念佛、臨終來迎、六方證明、三重稱讚、具如經文。

題目者、佛者、娑婆教主。說者、淨土教内八弁宣暢也。阿弥陀者、極樂化主、新譯經「ウ」題稱讚淨土佛撰受經。此題包依正。今只題阿弥陀者、舉能化一佛、攝所居万德也。一向歸依、七日稱念。究論之者、一佛功用、改不如此題名「ウ」。

有三段。自經始至諸天大衆俱、序分也。余時佛告長老舍利弗已下、至是為甚難、正說分也。佛說此經已下、流通分也。「ウ」

此經、一卷成部、五紙為卷。略而要也、肝而證也。淨土法門、卷軸是多。西方聖教、經論區分「ウ」。然而、各有所說、皆有所用。

觀經說十六妙觀。雙觀暢六八弘誓「ウ」。般舟明三昧行法。平等覺大阿弥陀「ウ」、明淨土微細莊嚴、如車ノ衆具、如人諸根、為行人各為至要。至此小阿弥陀經者、發心者所持、修行ノ人淨業也。故至西方者、以之為羽翼。往涼池者、以之為船筏。道珍「ウ」未讀「ウ」。夢行往生數、僧感持之身得淨土翅。故、善導和尚苦勸十万卷也「ウ」。讀誦、法道和尚常修引聲念佛。我朝大傳大唐之風、久承五臺之塵。慈覺大

師傳法道引聲、始自四明洞、及于諸寺砌、所々道場、在々伽藍。号例時勤、皆誦此經。是宿緣所催、機感所交也。今度清淨願、以鄭重誠、自寫十萬卷、手讀十萬卷、思食立淨土妙行之最尊也、往生極樂之定業也。哀展四日八座開講決擇、朝夕兩座聽聞隨喜。[六]人而、隱事、義而莫不顯。况寫十萬卷真文、弘一天下之間、手執目見者、皆御淨土淨業之因、四ヶ日之講論、弁調才錐之裏、傾頭合掌、悉萌中品下生之業。昔、天慶以往、(以下欠文)

(四)阿弥陀經

淨土目足、苦海舟楫也。指西方示人、擧念佛勸持。信者皆遂往生、修人悉蒙攝取。故十方佛土中、以西方為望。七日念佛間、雖一日可足、末代行者傾首讚彼佛、濁世群生合掌向彼國。六八弘誓莊嚴之國、聞者皆生歡喜。光明壽命無量之佛、念者悉抽誠心、以之為經大綱。抑、我君、讀誦此典御事、十七百一千一百八十一卷。既過善導和尚之行業、及懷玉禪師之薰修。言語不及心、行處誠何故。此御轉讀、如此積、承其故候、天下貴賤、院中男女、每聞召其死亡之由、或一卷二卷、或七卷或八卷、或五十卷、必轉讀之御、積及此數。此事、誠希有不思議候。或山林卜居、名利斷望、偏企菩提行、專發利他願。如法上人、清淨遁世者、猶未企此行、全無修此勤。一日万機之政、觸御耳無隙。九州四海之事、繫御意無暇。况御自行御勤、有何隙。御聽聞御志、無其暇。又、院中死亡之人、繼踵不絕。况天下天死之輩、折指無暇。

彼如文集詩云。昨日泣南隣者、今日哭北里者。誠天下天折、盈目滿耳者也。被始此御願之後、未滿二十日、或大炊頭師綱・少僧都證遍・入道左大臣等、驚耳之類如此。况墮巷終命、蓬戶亡身之倫不知之、不見之。而貴賤死亡每朝、參偏誦此典訪御事、千歲難聞。万古希有。黑闇獨逝輩、黃壤永去魂、不思依、我君慈悲、忽設冥途資糧。是誠、度衆生重御願也。豈非生極樂勝業哉。[七]

(五)阿弥陀經

凡夫出世之眼目也。彼岸引接之舟楫也。思之、盡虛空界莊嚴、如立掌。是七日百万念佛企、則滿六方三千舌相。聞則易信、實是、淨土指南也。誰不奉恃哉。

(六)次、阿弥陀經、明淨土莊嚴、勸往生之願也。生三界衆生、如蜚籠繭、因不知是非。在地獄者、只念苦、不知他事。在畜生、只念水、常無他事。在天上、只耽着快樂、無他念。但在人間者、上知天上之樂、下知三途之苦。又、聞佛教、知他方佛土之妙。故鑿此機緣、釋尊、於靈山說、弥陀本願、在舍衛述極樂莊嚴。聞佛願力、人皆憑之。聞淨土嚴淨、人皆欣之。勸人離穢土、引生欣淨國。是此、教宗要也。七日念佛、六方讚嘆、皆是、歎穢土之修行、詣淨土之證明也。不能委。

(三) 阿彌陀經

日中講說果遂、黃昏例時積功。極樂依正、不見如見、水鳥法音不聞如聞。讚歎法音、日々窮、廻向詞條々重。五濁能化難信之法、我君信案既深。六方世尊護念之誓、我君護持豈疎哉。故、十念成就、一心無亂、三尊來迎、千佛授レ乎。

(六) 佛說阿彌陀經

將釋此經、々無大小、須用三門。大意者、此經、部屬方等、機巨四教。方等大乗、略有四心。所謂、片小禪行、顯大广円、慈悲行願、事理殊レ陀也。此四義中、慈悲行願等攝也。慈悲行願中、弥陀四十八願、弥陀濟度利生也。此如來應跡、雖居西方淨刹、慈悲ハ專深。東方穢土故、垂二子慈悲、引接十惡五逆之罪人、以深重願力來迎。一念十念之少善ヲ改、念佛之行、弥陀之願、專被末代殊盛濁世也。故釈或諸教、所讚多在弥陀云々。或宿縁厚故、或教説多故云々。爰又、日本一洲、円機純熟、朝野遠近、皆歸一乘。就中、我山等弘、專在一乘。此円頓宗念佛之行、其至可一也。今、就之廻愚意候、此二法、和合可一ナル也。人師解釋モ、此事未見。先達得此義、未聞。今、以愚意案、円頓行者、三生願見普賢。見普賢、即得道歟、離三惡道歟。念佛三昧往生期順次、若二生歟、三生歟。若詣極樂案ハ、得道暫遲々、離三途事ハ必定也。經云。其佛本願力、聞名即往生乃至自致不退轉云々。究竟必至、一生補處云々。故、以凡夫身、取速疾證、無過念佛一門。然則、

中世宗教思想文献の研究(二)(阿部)

以此念佛一門、可属円頓行也。法花如説修行、即浄土因也。不用十六想觀、不假念佛三昧。念佛三昧、又即修行因也。不借一心三觀ヲ、不明十法成等ヲ。彼末代弘用、此時成也。其行如乳水、其果自東西、入者如列一城ト覺候也。若人問云。念佛三昧行、四教中何カ須答円頓速疾行也。故、天台四種三昧之中、常行三昧、以弥陀為法門主。歩々聲々念々唯在弥陀云々。三昧成就、奉見十方諸佛、如法夜觀星。妙案釋云。雖非本期觀力、使尔如照水鏡、自見其形云々。念佛三昧亦如此。觀經云。是故汝等、心想佛時、其心即是三十二相云々。善導和尚念佛セシカハ、佛出口中ヨリ、即此義一致也。但、同円頓觀行ヲ、為末代機根、念佛行尤相應。半行半坐之行、十法成乘觀、若坐若立之鎮、讀誦思惟之道、無智薄俗、無識女人等、難企之、難修之。至念佛一行者、尤易修、極易勤也。但、付之、所疑者、口唱阿弥陀三字、云々安誦六根懺悔、十法成就乎。案之、不識者、難凝觀門之案、假修円觀ト難叶者也。雖念觀、若修円觀、念佛者、是衆行者足也。夫、円頓觀證、巨一念三千妙觀。一念三千者、即空假中三諦、一念具者也。念阿弥陀三字、即空假中三觀也。阿者、本不生義、即是空觀也。弥者、即假諸法、巨法界歷然リ。陀者、中道究竟義也。故、唱此三字者、三觀一心、令足無間。三諦一念、縁具足故、此念佛法門、即円頓与一心觀、無二無別也。無智之輩不云、但唱三字、自然三智具足、繫縁法界、一念法界、無明塵勞、即是菩提也。界内界外、三道莫非一實、相依之。傳教大師、傳円意行、為上代根熟人。慈覺大師、傳念佛者、

為導末代無智也。共是、円頓妙行ナレトモ、隨時逗機根也。但、慈覺大師、得清涼山引聲念佛給、觀山三塔修之、為不唱彼引聲之輩、傳懺悔念佛法、或時至機名（マ）江之人、不知世、不修之。今、大和尚、忝承（元）大師芳跡、傳三密瑜伽、造聞求出此念佛法。或盛修此妙行給。遂叶慈覺之本懷。又、可叶山王之神慮（モ）。今般法案、以之為珍事者也。神明若合力給者、佛法王法共榮。佛天若饗應給者、魔民魔界何不却哉。如開白御願。故、裁佛法魔界、即法擇内。王室邪鬼、又出朝家、無治無術乎。保元大乱以來、既以數度。其間、人臣、邪正、如糸乱。朝廷賞罰、如反掌。昨日誇朝賞、踏人頂者、今日伏誅罰、獻亡頭。昔伏罪、投千里避暮者、今蒙抽賞、為一朝政柄。

三〇

三〇

建長五年三月二十二日時甲、於東大寺尊勝院中堂正面、書寫之畢。寫本者、光明院上綱覺遍之御本也。而去年之天、中冬之候、於賴覺律師許、勤仕唱導之時、申出之畢。數月申籠之条、依有其恐、今欲返上之間、為後覽、所馳筆也。後覽之輩、可哀其志而已。

右筆花嚴宗末葉法印宗性